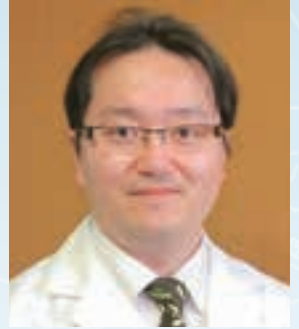




羅針盤

渡辺 大輔
Daisuke Watanabe

愛知医科大学皮膚科学講座 教授



性感染症は皮膚科の基本

本号より2号連続して、「皮膚科で診る STI」特集を組ませていただいた。日本の皮膚科の歴史は、土肥慶藏先生が1893(明治26)年にドイツに留学したのち、1894(明治27)年1月からウィーン大学のカポジ教授のもとで2年間皮膚科学の研鑽を積んだことから始まる。その後、プレスラウのナイセル、ベルリンのニッツ、パリのギョンのもとで泌尿器科学を学び、合計5年間にわたって欧州で皮膚科、泌尿器科を研修したのちに1898(明治31)年1月に帰国し、2月に東京大学助教授、6月には教授となった¹⁾。土肥先生は欧州での留学中、多数の梅毒、淋病といった“花柳病”の教育も受けたため、当時の日本の大学皮膚科学教室の多くは、「皮膚病黴毒学科」「皮膚病花柳病科」として開設されている。このことから、皮膚科学とSTIとの関連の深さがおわかりいただけると思う。

まず、本号ではウイルス感染によるSTIとして、HSV、HPV、HIV感染症を取り上げた。総論ではSTIについて原因病原体、感染様式や皮膚症状、また届出に関する法規などのオーバービューについて述べた。また、各ウイルス感染症の冒頭では、エキスパートの先生方に各ウイルスがおこすSTIについて、ウイルス学の立場から総説を依頼した。

性器ヘルペスは皮膚科でもよくみるSTIであるにもかかわらず、多彩な臨床症状を呈することから診断に苦慮する場合もある。また、抗体価の誤った解釈による診断がなされている例や、外陰部痛だけでの安易な診断、その後の患者指導によっては、QOLや尊厳などが著しく損なわれている例もある。そのため、典型例ではない

臨床例も多数供覧することとした。また、併せて外陰部痛を来す疾患や、性器ヘルペスを診療するうえでの大切な事項についても解説していただいた。

尋常性疣贅もそうだが、尖圭コンジローマは治療に難渋することも多い。HPV感染症については臨床例の提示とともに、外科的・内科的、また外用薬を用いたさまざまな治療法についても解説していただいた。

さらに、近年はHIVとほかのSTIの合併が目ざされている。STIにかかわらず、AIDS患者での感染症は非特異的な臨床像を呈することがある。また、STI患者の診療中にHIV感染が見つかることも少なくない。HIV感染症の項ではHIV合併STIの臨床像を提示し、“普通と違う”と思うところから、隠れているHIV感染症を疑う目を養う一助にいただければと思う。

Dermatological Viewでは、近年話題となっているHSVのイムノクロマト法による診断キット、またHPVワクチンについてのトピックスに触れていただいた。

全体としてかなりのボリュームとなったが、皮膚科領域でのウイルスによるSTIについての基礎、臨床について網羅的に学習できる特集になったと思っている。総論にも書いたが、STIとは恋愛や生殖活動といった人間の営みのなかで誰もが関わる可能性のある感染症であり、またウイルスにとっての感染戦略であるともいっていい。本号を通じて、ウイルスとヒトとのせめぎ合い、ウイルスのしたたかさについても、興味をもっていただければ幸いである。

文献

1) 性の健康医学財団: <http://www.jfshn.org>